

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
 ブログ <https://hokke-commons.jp> / メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

遂に願うべきは仏国なり

法華仏教研究会主宰・『法華仏教研究』編集長・当学林教学委員

花野 充道

日蓮の宗教の特質を一言で言えば、「安国を実現するために立正の戦いをする」という論理である。悟りを求めて、一念三千の観念観法を修しているだけでは、現実の国家の矛盾は何も解決できない。現実には国家に三災七難が起こり、民衆は塗炭の苦しみにあえいでいるのではないか。それを仏教者は見て見ぬふりをするのか。権実・正邪の混乱によって、国土に謗法が充満し、それによって災難が頻発しているのだから、権実の戦さを起こして正邪を決し、我此土安穩の仏国土を成就することこそ大乘菩薩の使命である。これが「立正安国の行者日蓮」の信念であった。

そのような日蓮の不自惜身命の決意を表わした文として、

命限り有り、惜しむべからず。遂に願うべきは仏国なり。(昭定五二七頁)

の文がある。この文は、日蓮が佐渡に流罪されて最初に執筆した『富木入道殿御返事』(五〇歳)に書かれた文であり、私は日蓮の宗教の特質を表わした文として好んで引用している。しかし、現代の日蓮研究者がよく用いる「大崎ルール」(真蹟現存遺文、およびそれに準ずる遺文のみを用いて日蓮の研究をする)によれば、この文を引用して論文を書くことはできない。この遺文は録内御書の編集にも漏れ、身延十一世の行学院日朝(一四二二—一五〇〇)の写本が存する録外所収遺文だからである。

その内容についても、徹底的な懐疑主義の立場に立てば、

仏滅後二千二百余年に月氏・漢土・日本・一閻浮提の内に、天親竜樹 内鑑冷然 外適時宜云云。天台・伝教は粗釈し給へども之れを弘め残せる一大事の秘法を此の国に初めて之れを弘む。日蓮豈に其の人に非ずや。

の文がまず問題にされるであろう。「一大事の秘法」の語は、弘安四年(六〇歳)作の『南條兵衛七郎殿御返事』(昭定一八八四頁、弘安四年、録内収載、日朝写本)以外に確認することができない。浅井要麟氏はこの遺文について、『昭和重修 日蓮聖人遺文全集』別巻の解題の中で疑義を呈しているから、徹底的に疑えば「一大事の秘法」の語の用例が他にないという理由で『富木入道殿御返事』の偽書説を主張することができる。その場合、最初に疑われるのは行学院日朝の身延門流による偽書説である。身延門流で早くから偽書が作成されていたという仮説がすでに提示されているからである。

ただ「一大秘法」という語が、真蹟現存の『曾谷入道殿許御書』(昭定九〇〇頁)に確認できる。そうであれば、「一大事の秘法」の語があるからと言って、それが直ちに疑義説の根拠になるわけではない。しかし、真蹟が現存しない以上、疑えばキリがないから、『教機時国抄』『如説修行鈔』『総勘文抄』の偽書説を主張する方法論をもってすれば、必ずや本書も疑義濃厚遺文(実質的な偽書説)とされるであろう。たとえ本書が真撰とされたとしても、



北斎「七面大明神応現図」より



花野充道 先生

真蹟現存の『曾谷入道殿許御書』は、日蓮が身延入山後に執筆した遺文(五四歳)であるから、本書の系年もまた身延入山以後にすべきである、という意見も出てくる可能性がある。

本書には、「一大事の秘法を此の国に初めて之れを弘む。日蓮豈に其の人に非ずや」の文の後に、

法已に顕はれぬ。前相先代に超過せり。日蓮粗之れを勘ふるに是れ時の然らしむる故なり。經に云く「四導師有り一を上行と名づく」云云。

と説かれているから、この文は末法出現の四菩薩を暗示していると考えられることも可能である。しかし、真蹟曾存の『開目抄』(五一歳)には、もっぱら日蓮が法華經の行者であることが示されているだけで、いまだ地涌の菩薩の自覚は表明されていない。それが初めて表明されるのは、『観心本尊抄』(五二歳)においてである。このように『富木入道殿御返事』は、その真偽についても、その系年についても、疑えばキリがないが、徹底的な懐疑主義者で知られる浅井要麟氏でさえも、前出の解題の中で、

この書は短文の御消息ではあるが、聖人の心理的推移の過程、思想的発展に一新紀元を画するものとして古来重要視されるのである。(二〇四頁)

と論じているように、古来、この書についての真偽・系年の異義は出されていらない。真蹟が発見されない限り、仮説の議論はどこまでも平行線を辿るしかないが、私自身は「大崎ルール」で単純にこの遺文を排除することなく、日蓮が佐渡で最初に著わした遺文という仮説のもとに日蓮の思想の深化を論じていきたい。真蹟不現存の遺文については、研究者が仮説を提示し合って真実を探求していくしかないのである。(結)

講義報告

末木文美士先生

仏教哲学再考

―『八宗綱要』を手掛かりに―②

報告 澁澤 光紀

昨年度(二〇二〇年)後期から始まった本講座では、『八宗綱要』をテキストにして諸宗の教義を学びながら、現代思想の視点も導入して仏教哲学の再考をはかるとう、末木先生の意欲的な講義が継続しています。第二期の五回目からは「法相宗」に入りました。法相宗の教義は、唯識・如来蔵思想であり、その仏教哲学における重要さから、講義は法相宗のみで3回となりました。

第一回目の講義では、まずインドの瑜伽行派から始まった歴史を辿りました。その教えの流れは、弥勒菩薩から無著↓世親↓護法↓戒賢にいたり、中国では玄奘↓窺基↓慧沼↓智周と繋がります。日本伝来には四伝あり、初伝が玄奘三蔵の弟子で行基の師匠だった道昭、第二伝が元興寺、第三伝と第四伝が興福寺です。

伝来後の平安初期に、法相宗の徳一と天台宗の最澄の間で「三一権実論争」が起こり、法相宗の「五性各別」と天台宗の「一切皆成」が対立しますが、講義ではその

続編というべき「応和の宗論」(九六三)を採り上げました。その宗論では、「無一不成仏」の読み方をめぐって、天台の良源は「一つとして成仏せざる無し(一切皆成)」と読み、法相の仲算は「無の一つは成仏せず(一闡提不成仏)五性格別」と読んで対立します。末木先生は、これは一見すると一乗説の方が平等に思えるが、現実的にあらゆる人々の救済を説いているのは五性各別の法相宗の方ではないか?と刺激的な言及をされました。

第二回では、「五位百法」と「阿頼耶識」についてふれます。宇宙万有を百法に分け、それを心王・心所・色・不相応行・無為の五位に束ねたうち、その初位の「心王」に属する八識(眼・耳・鼻・舌・身・意・末那識・阿頼耶識)を唯識の心識論として、詳しく解説されました。第七末那識とは、自我意識であり煩惱の汚染源です。第六意識は、この末那識を所依として働く識になります。第八阿頼耶識の訳は「蔵識」で、一切諸法の種子をその内に蔵しています。この蔵には三つあり、潜在的に種子がある能蔵、経験による種子が蓄えられる所蔵、そして末那識が執着することで生じる執蔵の三つです。

この心識論をふまえて、「五重唯識説」「四分説」「三性三無性(非有非空の中道)説」による唯識無境説が展開されていきます。そして、八識を転じて四智を成ずる「転識得智」の修行論が論じられます。四智とは、大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智で、第八識から第五識までが当てられます。この四智に法界体性智の大日如来が加えられ、五智と五仏で五智如来が登場すると、もう唯識思想は密教へと発展して行きます。テキスト上での法相宗解説はここ迄で、この回で読了です。

第三回では、唯識・如来蔵という仏教哲学を現代においてどのように捉えるのがテーマとなりました。始めは「唯識無境の問題」、これを認識論上の課題としていかに捉えるかです。唯識説では、認識における識

(主観)と境(客観)の二元性を、境を識に入れて(唯識)、全てを包む境+識=阿頼耶識の場で一元化します。しかし、この一元化には外部のない独我論の危険もあります。末木先生はこの東洋の認識哲学を、バークリーの観念論やカントの物自体を残す不可知論またフッサールの現象学と比較検討して、独我論に陥ることのない「はじめから他者が組込まれた《生きられた世界》の構造」としての現象学を提案します。

そして「如来蔵と阿頼耶識」では、『大乘起信論』の不变真如(物自体)⇄随縁真如(現象界)の対比を述べてから、『起信論』の「一心」を越えた十識説を示した『釈摩訶衍論』の可能性に言及して、そのさらなる検討を促して法相宗の講義を終えられました。

次回の第八回(九月十一日)は、「三論宗」(『八宗綱要』二七六頁、講談社学術文庫)からです。御受講下さい。

講義報告 法華仏教講座

第四回 村上東俊先生 講義

第五回 小松正学先生 講義

第六回 西岡芳文先生 講義

報告 布施 義高

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会の講義形式を踏襲し、毎年度後期・月一回・二時間の枠に、斯界で注目される学者・研究者を毎回交代制でお迎え申し上げている。ここでは、令和二年度第四回〜六回の講義を報告したい(第一回〜三回はコモンズ通信前号で報告済み)。第四回・第五回はZoomによる実況形式、第六回は対面形式で講義を執り行わせていただいた。

第四回は、令和三年一月二三日(土)、村上東俊先生による「釈尊の聖地から仏教の足跡を辿る—ルンビニとティラウラコットの最新調査—」。村上先生は現在、法華宗(陣門流)学林教授(監事)・立正大学法華経文化研究所特別研究員・法華仏教研究会編集委員・日本印度学仏教学会評議員などをお勤めの気鋭の学者である。当日は、法華宗(陣門流)の宗務院や学林の関係者などを含む多くの聴講者があり、盛会となった。

ネパールにある釈尊生誕地ルンビニ、並びに釈尊出家の地として知られるカピラ城の有力候補ティラウラコット遺跡の発掘調査が二〇一〇年からユネスコ主導により開始され、村上先生は現地調査実施の拠点・シヤンティビハールの住職も勤められている。

講義は、近時のルンビニ(Lumbini)における考古学調査(2010〜2013年)・ティラウラコット(Tilaurakot)における考古学調査(2014〜2020年)・Greater Lumbini area (GLA)における仏教遺跡群の調査(2015〜2018年)・そして「釈尊の聖地から仏教の足跡を辿る—ままとめと今後の課題—」の順序で体系的に進められ、今回の調査を通して、凡そ次のことが明らかになったと報告いただいた。

すなわち、仏滅年代として南伝説(544/533BCE)が支持され、ルンビニにおける釈尊降誕の最初期コメントが中央に聖樹(菩提樹)を祀り周囲を木材フェ

ンスで囲った祠堂(Timber Shrine)と結論されること。仏教徒によるルンビニへの礼拝巡礼がこの祠堂造営された釈尊入滅後に始まったと推測されること。また、今般の大規模な磁気探査が、仏教徒によるルンビニ巡礼は、クシャーーン期(1-3CE)に、ドハーニヤカルマが、ルンビニからティラウラコットやクダン、サガラハワ、アラウラコットへ訪れる際の中継地であったと推測しており、法顕(5CE)や玄奘(7CE)が訪れた

際には、仏教衰退・遺跡荒廃の様子が伝えられるも、それ以前には四大仏跡だけではなく釈尊の故郷カピラヴァストゥに思いを馳せた人々がゆかりの地として巡礼していたと考えられること。また、今回のティラウラコットの発掘調査では、法顕や玄奘の記録と符合する宮殿や宮殿遺跡の上に造営された伽藍、さらには城外東で僧院遺跡が新たに発見された。それは、ティラウラコット遺跡が法顕と玄奘が訪れた釈尊出家の地カピラ城であると確信させる画期的な成果であったこと。以上を承け、最後に、村上先生が見据えている今後の貴重な課題の数々が語られた。

共有画面上でPowerPointを駆使され、Zoomを用いたプレゼンテーションのお手本となる素晴らしい講義であった。

第五回は、二月一三日(土)、小松正学先生に「玄妙阿闍梨日什の伝記とその教風」の題でご講義いただいた。小松先生は頭本法華宗の教務部長・妙塔学林教授を勤め(当時〈現在・宗務次長〉)、玄妙阿闍梨日什大正師(以下、什師)の事蹟調査や、先哲遺著解説に携わる同宗の碩学である。当日は、頭本法華宗の宗務院や教育学鑽関係者など多数の聴講者にご参加いただいた。

小松先生は、什師の生涯を年表に沿って紹介され、その伝記・行跡の先行研究を検討。次いで、什師母方(清玉姫)の三浦氏(葦名氏本家)や葦名氏(佐原氏)



村上東俊 先生



小松正学 先生

について、また、什師の時代の三浦氏について細かな考証の成果を報告。什師の出自について従来の説への今一度の見直しを計られた。また、堂家氏及び庶流、石塚、石部氏のこと、三氏建立の社寺の紹介、什師の時代における葦名一族、葦名直盛(七代)、什師従兄弟、黒河城下整備)、同夫人、葦名詮盛、佐原金吾盛継(幼名・盛久、直盛次男)、日出山又次郎英秀(什師生涯の支援者、先祖は佐原氏)について微細に解説され、什師が布教され開基となった寺院の多くと三浦一族と関係の深さを明確にされた。

総じて、日什門流に伝わる諸伝記以外にも会津地方には什師の行跡を物語る史料が存在し、史料の穿鑿により、什師の出自については、父・覚知が源氏の末流ではなく、古くから会津に住む堂家庶流の石塚氏と考えられ、母は葦名盛宗の娘清玉姫で間違いのないこと。什師に帰依した葦名一族の人々が存在しており、什師の行跡を考える上で重要性をもつことが浮き彫りにされた。

その上で、日尹(富士派)、日宗・日満・日尊(日蓮宗中山(真間)門流)、日陣(陣門流門祖)等、日蓮門下各派諸師と什師との交流について、資料を精確に吟味しながら、その真相を尋ね、什師は天台宗からの改宗後のみならず、改宗前から日蓮門下と交流があったと思われること等を確認され、什師研究に新たな地平

を開かれた。

凡そ以上のように、従来の什師研究を大きく進展させる所見に充ちた貴重な講義となった。

第六回は、三月二七日(土)、新宿・常圓寺様三階会議室を会場に、西岡芳文先生をお迎えして、「中世の日蓮教団と富士信仰」の題で講義を賜った。

西岡先生は、日本中世史を専攻され、神奈川県立金沢文庫の学芸課長を長らくお勤めになり、現在は、上智大学特任教授(学芸員課程担当)として教育・研究に専心されている。

西岡先生の講義は、金沢文庫奉職時における聖教の整理・調査・研究の様子、日常的なライフワークをご教示くださるところからスタートした。その段階で、西岡先生にしか語り得ない、聖教の管理保存・記録化の貴重な歩みやエピソードの数々を拝聴でき、聴講者は皆、西岡先生が関わってこられた知の世界の魅力に惹きつけられた。

そして、先生の話題は富士山へと移っていく。大要のみ綴れば、ここでは、三国一の名山と称された富士山が、先史時代から現代にいたるまで日本人に畏敬され信仰の対象であり続けたこと。また、中世において富士山麓は東西日本の政治権力のせめぎ合う歴史的な舞台となり、様々な事件の現場ともなったこと。そうした中で形成された富士信仰は、神祇・修験のみならずあらゆる仏教宗派において象徴的な意味づけがなされ、重要な役割を付与されてきたこと。以上が、大変詳細な裏付けと共に明らかにされた。

さらに、ご自身が金沢文庫での調査で注目された『浅間大菩薩縁起』をキーとして論を運ばれ、日蓮門下、殊に日興門流における富士山の位置づけを考証の視座に据えながら、富士信仰、三仙人、金時・覽薩・日代、富士系諸寺の三堂の形態などの関係性を、厳密な裏付け

を示しながら明快にご教示くださった。

PowerPointを自在に駆使されながらの練られた明快な展開で、講義後の聴講者への質問にも大変丁寧に答えいただいた。内容の充実ぶりや話の絶妙な展開から瞬く間に時間が過ぎ去った、というのが受講者共通の所感であった。講義終了時には、聴講者から感嘆の拍手が送られた。

以上、どの回も、仏教学各分野・日蓮仏教の最新の研究成果に触れることができる素晴らしい講座であった。



西岡芳文 先生

講義報告

菊地大樹 先生

歴史から考える日本仏教 ⑦

日蓮と蒙古襲来の時代

報告 芹澤 寛隆

菊地大樹先生の連続講座シリーズ「歴史から考える日本仏教」は、2021年講座で第七期目を迎えました。前回講座「日蓮と蒙古襲来の時代」に引き続き、今回は、日蓮を育んだ房総地域の歴史や情勢に焦点を当て、「日蓮をはぐくんだ房総地域の歴史と宗教」をテーマとして、全六回に亘り、ご講義いただいております。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、前回に引き

続き、全講座がZoomによるオンラインでの講義でしたが、熱の入ったご講義と活発な質疑応答が行われました。ここでは、これまでに行われた三回の講座についてご報告致します。

第1講は「房総地域の古代史」として、日蓮が活躍した中世だけでなく、房総地域が古代以来どのような宗教環境であったのかを幅広い知識と豊富な史料をもとに緻密かつ明瞭にお教え頂きました。本講座では、日蓮に先立つ、房総地域の古代史を中心に参考文献である、千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』、石井進他編『千葉県の歴史』を用いつつ、風土と歴史・文化・宗教の関係について、その土地柄や環境が歴史や宗教に与えた影響は、単に地域史、郷土史のみならず、日蓮のような思想家を考察するときにも有効であること、また、地方史から考えることの意味について、通史のおもしろさ、中央の政治史との関連を捉えながら考察することの重要性をご教示いただきました。

古代中央集権国家が形成されていく中で房総地域はどのように成立していったのか、交通網や交易ルート、特産物などから見て取れる房総地域の様子を非常に精密にご講義いただきました。特に「総」の由来や「安房」の由来について様々な説を示しつつ、非常に興味深くご説明いただきました。

また、宗教面においても、上総に国内最大級の国分寺が建立されていたことなどから、豊かな経済状況や中央と宗教面でも強いつながりがあったこと、その中に於いて日蓮が生まれた安房国では8世紀前半までに創建された寺院はほとんどなく、一種の空白地であることをご教示頂きました。

第2講は「平安時代の房総地域」と題し、前回に引き続き日蓮登場以前の房総地域が政治史的、宗教史的に

どのような環境であったのかを幅広い知識と豊富な史料をもとに緻密かつ明瞭にお教え頂きました。

いわゆる38年戦争(奈良時代末期から平安時代初頭にかけたの蝦夷征討)により、既に中央政権の統治下にあった坂東は同時に征討軍の供給地ともなり、次第に軍事を委ねられるようになっていったこと、それと同時にいわゆる軍事貴族が坂東において成立し、彼らが鎮守府將軍等の役職に任じられていたことから、中央集権とは言いながら一種の独立性を有していた可能性があり、かつ同時に蝦夷との関係は戦争だけでなく交易という面を備えていたということを、史料をもとにお示しいただきました。

その流れの中で起こった平将門の乱について、一族の内訌、官物納入を巡る内紛、中央の有力貴族との関係、さらには将門に対して、追捕凶賊使として任じられた人物もかつて追捕対象であったことなど、毒を以て毒を制する対応が為されたことなど、様々な角度から論じていただきました。

この将門の乱やそれに引き続き起こった平忠常の乱の影響で、房総地域が疲弊していたこと、房総を治めていた相馬氏や上総氏、千葉氏らが平治の乱で平氏に対立したいわば負け組であり、そうしたビハインドから脱却するために源氏に加担した可能性のあること、地域の特徴として海運が盛んであったことから伊勢とのつながりが強く、他の地域に比べ御厨が多く点在していることを簡潔にご教授いただきました。どちらも後の中世に於いて、房総地域の特色を大きく左右するものであると言え、特に御厨については日蓮がその遺文中にも示しているように、日蓮の思想形成に大きな影響を与えていたこともお示しいただきました。

第3講では「鎌倉幕府の成立と房総地域」と題し、前回に引き続きこれまでの古代・平安時代における房総

地域の歴史的経過を踏まえ、伊豆国で拳兵し相模国石橋山の合戦にて敗走、房総に逃れ再び拳兵した源頼朝による鎌倉幕府の成立まで、また房総で頼朝を支援した在地武士など、頼朝をめぐる房総地域の様々な状況についてご説明いただきました。

鎌倉幕府成立の歴史的前提として、平安時代に関東各地に勢力を伸ばした郡司の系譜を引く軍事貴族や豪族の存在があること、その中で有力な東国武士が都で院や摂関家に奉仕し、東国に居ながらにして中央との密な関係を構築していたことを通し、かつて定説とされていた「東国独立国家論」では説明できない状況が坂東にあったことをご教示いただきました。

その上で、源頼朝を支え、鎌倉幕府成立に至るまでの坂東武士等の動きを多くの資料を示しつつ詳細にご講義いただきました。前二回の内容を踏まえ、頼朝等の動きを見ると、鎌倉に幕府が作られることになった流れ、中央との関係などが鮮やかに確認することが出来、菊地先生のわかりやすい解説と共に、受講者一同、新たな視点に感銘を受けました。

毎回講義後は多くの質疑があり、それらに菊地先生は一つ一つ丁寧にお答えくださいました。オンラインという特性上、自宅の資料を示しつつ質問される方がおられたなど、とても熱心に議論が行われました。日蓮登場以前の房総地域を知ること、日蓮の幼少期、青年期の思想形成に、地域が与えた影響を知ることにつながります。後期には日蓮と房総地域、さらに房総地域の宗教文化史についても講義がなされる予定です。さらに興味深い内容が続くことに、待ち遠しい気持ちを受講者一同抱いております。

後期は第4講「日蓮の活動と房総地域」から始めております。引き続き多くの皆様の聴講をお待ちしております。

日蓮靈跡の再認識と顕彰の歴史

報告 西山 明仁

本年四月～六月にかけて、寺尾英智先生の「日蓮靈跡の再認識と顕彰の歴史」全三回の講座が行われました。本講座のねらいについて講師の寺尾先生は「日蓮聖人の活動に関わった場所は、後世靈跡と位置付けられた。鎌倉や房総などの日蓮靈跡が、近世の知識人や庶民層などにどの様に認識されていたのか、また寺院側が靈跡をどの様に社会に提示していたのか、日蓮靈跡の具体像の一端を明らかにしたい」と説明されました。以下、講座の内容について要点を絞りご報告致します。

四月、第一回講座。松葉谷法難や龍口法難など、日蓮聖人の事蹟が色濃く残る鎌倉の日蓮靈跡について。はじめに、鎌倉について述べられている江戸時代の地誌・名所記として『新編鎌倉志』、『鎌倉名所記』、『東海道名所図会』の三書を挙げ、それぞれの本に特徴があり、日蓮靈跡であると主張する寺院が、地誌によっては日蓮靈跡とは紹介されていない場合があった。次に、近世の人びとにとって重要な案内標識として機能した石塔について。出開帳において日蓮靈跡由緒寺院であることは、観光客を集客する上で重要な意味を持つため、寺院はそれぞれ石塔を建立し靈跡由緒であることを主張した。その結果、近隣の日蓮宗寺院同士が靈跡由緒を主張し合い、対立を招き訴訟に発展するケースがあった。このように靈跡由緒の主張と寺院経営が密接な関係を持つていたことが分かる。

五月、第二回講座。藤沢市片瀬龍口刑場跡にある「龍口寺」について。まず、龍口寺の創建年代は不明、資料的にも乏しいが、鍋かむり日親の師僧中山法華経寺日英の記録（応永年間）が残っている。次に、日蓮靈跡としての龍口寺に関する記述が見られる近世の資料について、13点の資料を刊行年次順に整理し、「日蓮首の座石」「日蓮土籠」「膳窟」「光の松」「敷皮堂」について、それぞれの資料の記述並びに挿絵の有無を一覧表にして提示。続けて、龍口寺と日蓮靈跡について記された18点にのぼる資料をご紹介します。詳細なご説明をいただいた。

六月、第三回講座。誕生寺と日蓮聖人ご誕生の靈跡について。最初に、日蓮聖人の生地地名に、資料によって小湊・片海・市河などの地名が見られることについて寺尾先生は、現在ではそれぞれの地名として認識しているが、当時は小湊・片海・市河と同じ場所として認識していたのではないかと指摘。次に、日蓮聖人のご誕生について。ご誕生の奇跡として誕生水、蓮華淵について多くの伝記本に語られているが、本によって表現が異なる。また、誕生水・蓮華淵と並び三奇瑞といわれる妙の浦は、伝記本には記載が無く、三奇瑞が揃って記されるのは、昭和六年『日蓮聖人降誕之聖蹟妙の浦由来』が初出。続いて、江戸時代の靈跡顕彰について。江戸時代前期



寺尾英智 先生

の資料『日遵覚書』によると誕生寺では、江戸前期に石塔建立などの靈跡顕彰を行っている。寺尾先生は、誕生寺は不受不施派の旗頭の一つであり、身池対論後は悲田派として存立するが、元禄年中に悲田派は禁止となる。不受不施・不受不施の争いと靈跡顕彰が同時期に行われている、と靈跡顕彰と不受不施・不受不施の関係について指摘。

全三回の講座を通して寺尾先生は、江戸時代に於ける靈跡由緒の主張と、寺院経営が密接な関係を持つていたこと、また、日蓮靈跡の顕彰の時期と、不受不施・不受不施の争いが時を同じくすることを指摘されました。そこには、江戸時代に隆盛した寺院の出開帳による一般の民衆や、観光客に対する布教宣伝という社会的一面と、不受不施・不受不施という宗内の対立、ひいては江戸幕府の宗教政策の影響による宗教的・政治的一面があったといえます。即ち、江戸時代に於ける日蓮靈跡の顕彰の背景には、宗門の内と外に対する二つの側面が内在していたと考えられます。

毎回の講座で寺尾先生は、事前にご用意いただいたレジュメに、日蓮靈跡に関する豊富な資料をご紹介、加えて各資料の挿絵や、寺尾先生ご自身が撮影された写真など、多岐にわたる資料をご開示、一つ一つについて分かりやすく丁寧にご説明くださいました。ご紹介いただいた写真の中には、今は立ち入ることが出来ない岩屋（御霊窟）の内部の写真など貴重な資料もあり、受講者一同、貴重な資料を興味深く拝見しました。

法華コモンズでは各界に於ける最先端の研究者を講師に招き講座を開講しております。今後の講座については、法華コモンズのホームページをご確認の上、どうぞご聴講ください。

『法華経』 『法華文句』 講義

本年度前期においてもコロナ禍は治まらずに、オンライン実況での開催が続きます。35回目となる四月講義から、いよいよ「方便品」に入りました。本文に入る前に、概論となる広積から始まります。「方便品」の方便とは *Upaya-kausalya* を漢訳したもので、『法華経』では「善権品」と訳されています。方便≡権ですが、この権も「目的に達するための手段」という意味で、実教に対しての「権教」として使われます。

方便には「法用方便」「能通方便」「秘妙方便」の三方便があり、秘妙方便こそが法華経における方便となります。この三方便は、いろいろな角度からの料簡（問答を繰り返して真実を求める）により解釈されています。

続いての五月の講義は、テキストの三三四頁四行目となる四種類の二慧（空と有を論じる）ところからです。先生のご説明では、湛然は「四種の二慧」について吉蔵の『法華玄論』を参照して書いていますが、実は湛然は『法華玄論』を読んでおらず、その後の日本の宝地房証真（鎌倉前期）がきちんと『法華玄論』を読んだうえで、湛然を批判しているとのこと。

この二慧の説明の次には、有権有実の句について「十法」を挙げての説明が続きますが、よくやく六月講義で広積を終えて、七月からは方便品の本文（四〇八頁より）に入ります。八月講義まではオンライン実況を予定しています。しかし感染状況が好転すれば、九月からは対面講義を再開いたします。これから受講をお考えの皆さま、ブログの「講義のようす」欄で、講義進行の概容が分かります。ご参照いただき、御聴講を頂きますようお願いいたします。（担当スタッフ）

賛助会員一覽（敬称略）

個人会員

※1口 一万円

6口	小松 正学	2口	菅野 博史
6口	松原 勝英	1口	覚藏寺
6口	中野 顕昭	1口	椿澤 舜玄
5口	鈴木 正蔵	1口	長谷川正浩
3口	持田 貫信	1口	菊地 大樹
3口	竹内 敬雅	1口	西山 茂
3口	村上 東俊	1口	濫澤 光紀
2口	西山 英仁	匿名	希望

法人会員

※1口 五万円

3口	本國寺	2口	東洋哲学研究所
2口	持法寺	2口	善龍寺
2口	本妙寺	1口	摩耶寺
2口	大久寺	1口	天龍寺

（以上）

特別支援団体

本多日生記念財団

18万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

皆さまのご賛助ご支援に篤く感謝申し上げます。

年間賛助会員加入のお願い

【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口（1万円）
- 法人・団体会員 1年間1口（5万円）

《特典》●個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を授与。●法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を授与。●表紙上・校内のメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

- ★ 個人か法人か、また何口かを明記する。
- ★ 名前、年齢、住所、電話、ファックス またメールアドレスを明記する。

●直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて連絡欄に必要事項をご記入の上、左記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 00150071634712

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

法華コモンズ通信 第7号

○発行日 2021（令和3）年8月1日

○編集発行 法華コモンズ仏教学林

○発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一十九

【FAX】 042（627）7227

法華コモンズ仏教学林 後期講座一覧

2021(令和3)年度後期講座 開講:10月～(2022)3月

《 対面講義が不可の場合は、開催日時でのオンライン講義、または講義動画配信にて開講します 》

連続講座 「**仏教哲学再考—『八宗綱要』を手掛かりに③**」 講師：末木文美士 先生

第9回 2021年11月6日 / 第10回 12月11日 / 第11回 2022年1月8日 / 第12回 2月5日

※日時は、土曜日の午後4時30分～6時30分 ※第1回より、オンライン実況での講義を開講中

【受講料】1期4回分 10,000円 / 【教材】鎌田茂雄全訳注『八宗綱要』（講談社学術文庫）

シリーズ講座 「**法華仏教講座**」全6回 ※日時は、土曜日の午後4時30分～6時30分

第1回 10月 2日 「台密における日蓮の血脈相承の系譜」 講師：川崎弘志 先生

第2回 11月 27日 「近世における日蓮聖人遺文の編纂を考える」 講師：木村中一 先生

第3回 12月 4日 「『観心本尊抄』本尊段の本尊と「本門本尊」との関係について」 講師：宮田幸一 先生

第4回 1月22日 「法華コモンズがめざすもの」 講師：西山 茂 先生

第5回 2月26日 「有と無と空と空性と」 講師：大竹 晋 先生

第6回 3月26日 「天台教学の四重興廃と日蓮教学の五重相對」 講師：花野充道 先生

【受講料】 12,000円（全6回の講義分）※当日1回の受講料は3,000円

《**歴史から考える日本仏教⑧ 裏から読む鎌倉時代—日蓮遺文紙背文書の世界—**》

※原則火曜日、開催時間は午後6時30分～8時30分

講師：菊地大樹 先生

第1講 10月19日「日蓮遺文紙背文書とはなんだろう」 / 第2講 11月16日「日蓮と富木氏・八幡荘」

第3講 12月21日「千葉氏の活動と京・鎌倉・鎮西」 / 第4講 1月18日「日蓮をとりまく金融経済の世界」

第5講 2月15日「日蓮をとりまく百姓の世界」 【受講料】 10,000円（全5回）

《**『法華経』『法華文句』講義**》

講師：菅野博史 先生

※原則 第4月曜日 午後6時30分～8時30分

第1回 2021年10月25日 / 第2回 11月29日 / 第3回 12月20日

第4回 2022年1月31日 / 第5回 2月28日 / 第6回 3月28日

【受講料】 12,000円（全6回分の講義分）※当日1回の受講料は3,000円

【教材】 『法華文句』I～IV（第三文明社、各冊2,530円のところ、受付にて割引2,000円で頒布）

【会場】 新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797（寺務所）

【申込】 受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX：042-627-7227

mail：hokkecommons@gmail.com / ブログ：<https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 **法華コモンズ仏教学林 事務局**